

産休明け保育

0歳児（57日児）

おおくぼ保育園

【子どもの様子】

- ・まだ首もすわっておらず完全に横抱きの状態。
- ・まとまって睡眠をとる、生活リズムを作るまえの状態でちょこちょこ眠って起きてのくりかえし。
- ・横になったまま手足を動かして遊ぶ。
- ・時々声を出す。話しかけたり、笑顔で顔を合わせると笑って応える。

【目的】

産休明けで職場復帰する保護者などの支援を目的とする。

【心掛けたこと】

- 安心して心地よく過ごせるようにする。
- ・スキンシップと笑顔のやり取りを大切にする。
- ・子どもの様子をよく観察し、要求や思いを感じ、さぐっていく。
- 生活リズムの確立。
- 保護者との連携を密にし、子どもの情報を共有することで適切な保育につなげていくようにするとともに保護者にも安心して預けていただけるようにする。

赤ちゃんは、何も言えないけど、たくさんのことを見たり聞いたりしているんですね。

ミルクの時間ですよ。

良いお天気で気持ちいいね。



【考察】

生後100日を過ぎると、正常な発達を遂げている中で体の機能はかなり安定して、生きる力が付いてくるが、産休明け児はその時期に至らないため、保育においても特別な配慮が必要となってくる。そのため、保育にあたる者は、常にそのことを念頭に入れ衛生面・環境面に気を配り、事故防止を意識し、全面的に保護した中で安定した生活を送れるように配慮していくことが重要となってくる。日々の体調観察は、異常を早期に発見することができ、事故防止にもつながる。

☆子どもの様子をよく観察し、保護者との連携をとりながら少しずつ生活リズムを整えていく。
☆睡眠中は細心の注意を払い、呼吸の確認や溢乳に気を付ける。
☆発達を促すためにたくさんの刺激が受けられるようにたくさん関わっていくことも大切。
・オムツ交換や授乳の時のスキンシップ、泣いたときの抱っこや目を見ながらの優しい声掛けなど。
☆いろいろな月齢の子どもたちがいる中では、安全確保と衛生的で落ち着いた環境づくりの配慮が必要。
・ベビーベッドやサークルなどを活用し、安全に留意する。

産休とは、生後8週（生後56日）までの期間のことを指します。母親が育休をとらずに仕事復帰する場合、産休明け（生後57日）で保育園に子どもを預けるようになります。これを産休明け保育と言います。



体力や体の機能が未熟な子どもの保育は、園の色々な職種の人の協力を得ながら、安全に十分留意し、安心して保護者が預けられるようにしていくことが大切です。

産休明けの授乳（冷凍母乳）

【子どもの姿・思い】

・首がしっかりしてきてあ
やすとにっこり笑って応え
る。好きな玩具を渡して一
緒に遊んでコミュニケーション
を取り、過ごしていた
・音の出る玩具が聞こえ
ると足をバタバタして反応し
たりベビーベッドの柵に設
置してあるメリーを目で追
いかけたり玩具に興味を示
して楽しんでいた
・保育者が一緒に遊ぶと声
を出して笑い、寄り添って
過ごすようにした

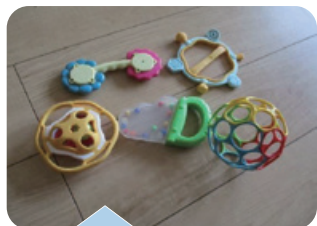
【ねらい・意図】

・母乳育児をしたいとい
う思いを大切に冷凍母乳
を預かる
・家庭での保育に寄り添
った保育を考えながら、
ミルクも母乳も飲めるよ
うにし、園での生活リズ
ムを作り、安心して過ご
せるようにする

わらべ日野市役所東保育園

【心掛けたこと】

・子どもが安心してすごせ、
自分の気持ちを伝えられるよ
うに受け止めた
・冷凍母乳の管理、解凍を行
うため授乳時間の調節も行う
（受け取る際は氏名・搾乳日
時・冷凍状態を確認して受け
取る。受け取ったら冷凍庫へ
入れる）
・冷凍母乳は流水解凍をし、
湯せんをかけ適温にする。使
用しなかった分はその日のう
ちに返却するよう保護者との
連携を図る



口腔の発育を促すため、歯固
めやスプーンなどの食具を持つ
練習をするための玩具も用意
し、離乳食へつなげた



連絡を密にして、安心して
預かれるようにします。

【保護者との連携】

保護者と量や子どもの体調な
どを詳しく情報共有し、連携
を図りながら進めていく

【ミルクと母乳の授乳の仕方】

その日の母乳の量とその都度
のタイミングに合わせて行った

【保育の経緯】

・ミルクも母乳も順調
に飲む量が増え、笑顔
が増え少しずつ自分の
気持ちを身振りや手ぶ
りなどの仕草で表現で
きるようになった

【考察】

保護者にも家庭で実践できることを発信したり、心配事を聞いて、一
緒に解決策を考えていったりなどのコミュニケーションも大切だと思
う。様々な家庭の背景も考慮しながらその子どもにあった対応を見つ
けていかなければと日々我々も子どもたちから学ぶことが多いと感じ
る。家庭での授乳の時間や量を把握しながら落ち着いた環境を作っ
ていく。一人ひとりの発達に応じて様々な食材や形状に慣れていく。冷
凍母乳の良さとしては、園でも親の気持ちに寄り添ってあげられるこ
とである。配慮する点は24時間以内のものを持参してもらい、園の
冷凍庫に保管することを心掛ける。また、衛生的に扱う様に十分気
を付けることに難しさを感じたが、とても重要なことである。

冷凍母乳は難しさもあり
ますが、家庭と同じよう
な授乳環境を作ってお
けることで、子どもに安心
を与えられますね。厚生
労働省のガイドラインを
閲覧し、自園のマニュー
アルをきちんと作成してお
きましょう。



遊びの中で育む はじめのいっば

0歳児9カ月

あさひがおか保育園

【子どもの姿、思い】

自分で立ち上がった
り、つかまり立ちがで
きるようになったりした
ことが嬉しくて毎回手
を叩いて喜んでいる。
歩けるようになった友
だちを見ながら、自分
も“歩いてみたい”と
いう気持ちは溢れてき
ているが、なかなか最
初の一步を踏み出せ
ずにいた。

【ねらい・意図】

- つかまり立ち、つたい
歩きなど体全体を動か
してあそぶことを楽しむ。
- 歩くことに興味を持
ちやってみようとする。
- できた喜びを保育者
と一緒に喜ぶ。

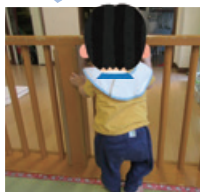
【心掛けたこと】

安心してチャレンジでき
るような広いスペースや距離
を確保し、安全な環境を整
えた。探索意欲を刺激し歩
いてみたい気持ちを引き出
していった。
保育者は子どもが不安に
ならないように手がすぐ届
く位置から、歩いてみたい
という気持ちを持てるよう
な声掛けをした。
本児の発達状態やサポー
トの仕方を保育者間で共
有した。



あんよができると
たのしいことが
いっぱいだね!!

おいで～! あんよ!
あんよがじょうず♪



【考察】

つかまり立ちやつたい歩きなど体全体を使って繰り返し遊び、遊びの中で“歩きたい”という気持ちを育てていく事が大切である。又、信頼できる大人とのスキンシップを沢山とりながら一緒に喜んでもらったり認めてもらうことで“歩きたい”という意欲が生まれ自信につながり、歩けるようになる。
その子の成長発達をしっかり把握した上で、保育者(大人)が働きかけるタイミングも大切である。

【保育の経緯】

保育者と他児が触れ合いながら楽しそうに歩いて遊んでいる様子を見て、歩くことへの興味が高まった。保育者に「○○ちゃん!おいで～あんよが上手!」等リズムを付けながら声をかけられると手を前に伸ばし保育者の胸に飛び込むようになった。繰り返しうちに安定して一歩が出るようになった。保育者に一緒に喜んでもらったり認めてもらったりしたことによって日々歩数が増えていった。



安心して歩いてみたいという気持ちを育むことが大切ですね。「はじめのいっば」を保護者と喜び合いましょう。

乳児期の感覚を刺激する遊び

0歳児6月

万願寺保育園

【子どもの姿】

ものに触れる経験が少ない為か、目の前におもちゃがあっても触れようとせず、戸外遊びの中でも葉っぱや砂に触ることを怖がる姿が見られた。また、離乳食を食べたい気持ちはあるが、食材に触れることに抵抗がある様子だった。

【ねらい・意図】

様々なものに触ってみることで五感を刺激し、今度は他のものにも触れてみたいという気持ちが子ども一人ひとりに育まれるようにしたい。

【心掛けたこと】

保育室に感覚マット(スズランテープ、布、芝生、卵パック、気泡緩衝材)を準備し、日常生活の中で興味を示した時に触れられるようにした。フィンガーペイント、寒天、氷、小麦粉、じゃが芋の調理、太陽の光で影遊びなど一年を通して五感を刺激する活動を準備した。

(寒天遊び)



視覚からも楽しめるように色鮮やかな4色の寒天を作りました。

(小麦粉粘土遊び)



子ども達と一緒に、小麦粉のサラサラから、水を加えて粘土を作り、感触を楽しみました。

【保育の経緯】

はじめは保育士が行っている様子を見ていたが、高月齢児が保育士と一緒に楽しそうに行う姿を見て、そっと触れてみようとする姿があった。子どもが安心する環境の中で行うことにより、積極的に触れる姿が見られた。様々な素材の経験を重ねることで、戸外に出ても積極的に活動できるようになった。

(光の影絵遊び)



カラーセロファンを使った光の色の变化を子ども達が発見しました。

【考察】

感覚遊びを通して、安心できる環境の中で経験を重ねることにより、はじめての活動にも楽しんで取り組めるようになった。素材に合わせた指先の使い方ができるようになった。一人ひとりに合わせて行ったことで「やりたい」意欲が見られた。保護者からも家庭では経験できない遊びができてよかったとの声もあり、環境を通して、子どもの健やかな育ちを支え、促していく事に保育園の特性があると言える。



身近な素材を使って五感を刺激する遊びを取り入れることで、子ども達が発見したり、遊びを展開させたりと、保育園ならではの遊びが出来ますね。

遊んで伸びる力 1歳児

至誠第二保育園

【子どもの姿・思い】

テラスで空から降って来る雨を眺めていると、雨に触ってみたいという衝動からか手を伸ばす姿が見られた。翌日、園庭に出た際に砂場のビニールシートの上で発見した雨の水溜まりを見つけると、子どもたちは水溜まりへ入っていった。日頃、砂場での遊びはしているが、泥水で遊ぶことはなかった。

【ねらい・意図】

ぬるぬる・ざらざら・どろどろたくさん
さんの感触や全身で感じられる感
覚遊びになるように工夫する。
また、「試す」ことで「こんなこと
ができる!」や「面白かった」など
を発見することもできる。

【心掛けたこと】

泥は砂と水の配分に応じて形や粘度、手触りが変わっていくので、水気のないさらさらの砂や水を含んだどろどろの砂などの環境を用意し様々な感触を味わえるように配慮した。また、手だけではなく泥の上を裸足で歩くことで、足の裏から伝わる感触も楽しめるようにした。

【考察】

びちゃびちゃ飛び跳ねる泥水に好奇心を示し、水の変化に興味を示す姿が見られた。最初は素足の感触に嫌がる子どももいたが、楽しむ他の子どもを見て徐々に慣れて楽しんでいる様子だった。水が流れてくると「川だあ〜!」と喜んだり、黙々と穴を掘ったり、見立て遊びやごっこ遊びなど、好きな遊びに向き合うことができていた。



【保育の経緯】

様々な感触を味わえるよう環境を整えたことで、ぬるぬる・ざらざら・どろどろなどの感触を味わうことが出来ていた。また、月齢や性別などで遊び方がそれぞれ異なるので、素足で歩く感覚や五感の刺激など、面白いと思ったことを繰り返し行う姿が集中力や探求心に繋がる。また、ぬかるんだ土の上を歩いたり、ハイハイして踏ん張る経験で体幹を鍛えたりすることも出来ると考えた。日頃周囲に関心が見られなかった子どもも自ら遊び始め、友達のやっていることを真似たり、かわりを持ったりする姿も見られた。このような体験を通して子どもたちの五感や感性が育ち、育まれていく。



自然現象を保育に取り入れ、子ども達の興味や関心をどろんこ遊びに発展させる保育は、子どもの五感を刺激しますね。

「何だろう?」「不思議だな」

1歳児10月

栄光豊田駅前保育園

【子どもの姿】

夏頃からは、友達や保育士と手を繋いで公園まで嬉しそうに歩いている。すっかり秋めき、舞い落ちた葉っぱの中にどんぐりを見つける。形や大きさが違うどんぐりに興味を示す子どもたちに“身近な自然物に親しむ”姿が見られる。

【ねらい・意図】

自然物のどんぐりなどに触れることを通して、子どもが「何だろう?」「不思議だな」と感じ、新しい発見をし、身近な自然物に親しむ体験をさせたい。

【心掛けたこと】

- ・日常生活の中で、「どんぐりころころ」の歌を歌う。
- ・図鑑や絵本で興味を示せるようにする。
- ・見つけたどんぐりの会話をする。
- ・拾ったどんぐりを入れやすく工夫した「どんぐりバック」を製作する。

小さい
どんぐりだよ。

大きいどんぐり
見つけた。

帽子かぶって
いるみたい。



【保育の経緯】

秋になり、時々訪れていた公園のあちこちに大小様々な形をしたどんぐりが落ち始めていた。そのたびに拾ったどんぐりを握りしめて持ち帰っていた。この日は、目をキラキラと輝やかせ「どんぐり!」「小さいの!」「大きいの!」とあっという間に、どんぐりバッグがずっしり重くなる程のどんぐりを拾い大満足な子どもたち。拾ったどんぐりは「大切な宝物」。大事に持ち帰る姿があった。

【考察】

「大きい」「小さい」「丸い」など、どんぐりの様々な形に気づいたり、「枝」「葉っぱ」「ぼうし」が付いたどんぐりを発見したりしていた。季節の自然物に触れ、感性や創造性を高めることができたと言える。

どんぐりがたくさん
拾えて楽しかった!



身近な自然物から発見できることはたくさんありますね。四季折々の自然に触れ、子どもが主体的に、興味関心を持てるのは素敵ですね。

身近な物を使った製作

1歳児10月

至誠ひの宿保育園

【子どもの姿、思い】

日頃から紙いっぱいにお絵描きを楽しむ様子があった。

また、食育を通して様々な野菜を手にとって触れたり、絵本で野菜の断面を見たりする機会を通し野菜に興味を持っていた。

【ねらい・意図】

生活や遊びのさまざまな経験を通してイメージや感性が豊かになるよう、筆を使った手法以外の絵の具の楽しみ方を知らせる。また野菜を使ったスタンプ遊びを体験できるようにする。

【心掛けたこと】

子ども達の興味が継続できるように野菜の断面と一緒に見るなど援助した。野菜や絵の具は好きな物が選べるように複数、用意した。

★絵の具遊びの様子



イーゼルを準備することで、絵を描く気持ちが上がりました。

★使用した野菜



れんこん、ちんげんさい、パプリカ断面はワクワクがいっぱいです。

【保育の経緯】

一人一人に寄り添いながら、子どものペースに合わせ進めた。絵の具のぬるぬるした感触や手に付くことを嫌がる子どもには、手を取って一緒にやってみたり野菜の形を見たりしながら楽しみを持てるようにした。

★野菜スタンプの様子



絵の具を付けてスタンプを楽しみました。

【考察】

実物の野菜、絵本、野菜スタンプでの製作と、活動をつなげることで、子ども達の経験を広げ、絵を描くだけではない絵の具の楽しみ方を知ることができた。

身近にあるものから、発展させていろいろな製作活動に繋げていきたい。



身近なものを使って、様々な活動を自主的につなげていけるような保育の仕方は、これからの活動の広がりが期待できますね。

見通しが持てるような朝の支度の進め方 3歳児4月

たかはた台保育園

【子どもの姿、思い】

乳児クラスでは保護者が行っていた朝の支度を自分たちの活動と捉えるには、個人差が大きい。鞆を取るために保育室から出ると、テラスで虫を見つけて観察する姿があったり、おたより帳に貼るシールにこだわりなかなか選べなかったりと、時間がかかる活動であった。

【ねらい・意図】

乳児クラスから幼児クラスへと進級した3歳児クラスの4月には、見通しが持てるような朝の支度の進め方を工夫する。

【心掛けたこと】

朝の支度が終わると好きな遊びが楽しめるような時間を設け、担任が3歳児の興味に合わせながら、それぞれの子ども達の好みにも配慮し、手作りのおもちゃを用意した。

ぱちんと音がして、つながるんだよ。

【保育の経緯】

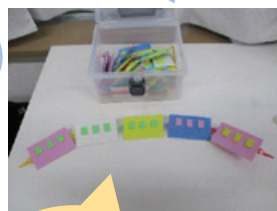
一人一人の子ども達に寄り添いながら、時間をかけて丁寧に進めた。手作りおもちゃに導かれた子ども達の姿以外にも、早く支度ができた友達から遊びに誘われるような姿も見られるようになってきた。

びよーんって伸ばして、引っかけて...

キラキラしてて、きれい！



ゴムを伸ばす動作は、靴下を履く練習にもなるのね。



低コストだし、柔らかく軽い素材なので、友達と長く繋げても安全。

梅干しのカードはどこかな。

おにぎりという身近な食材で神経衰弱をするところが面白い！食育にも繋がるわ。



仲間との交流の広がりに合わせて、カードの枚数を増やしたよ。

【考察】

時間をかけて、一人一人に丁寧に対応して積み重ねてきたことで、子ども達に支度をしてから一日がスタートするという意識が芽生え、幼児クラスとしての成長も感じられるようになり、集団としての活動へと広がりが見られるようになってきた。



乳児クラスから幼児クラスにかけて、子ども達が自主的に朝の支度が出来るための工夫として、手作りおもちゃが用いられているのですね。

鬼ごっこによる子どもの成長と変化

3歳児 | 2月

しんさかした保育園

【子どもの姿・思い】

3歳児の春は保育士が追いかける追いかっこを楽しんできた。大きな行事を終え、集団のまとまりが見えてきた12月頃からルールを明確にした鬼ごっこを活動の中に組み込み、皆で遊びを深めていくようにした。

【ねらい・意図】

- ・寒さに負けず戸外で十分体を動かす。
- ・友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。
- ・ルールを理解して遊ぶ。

【心掛けたこと】

鬼にタッチされたら指定の場所で待つ、鬼は全員タッチすることができたら交代というシンプルなルールで始め、慣れてきてもルールは変えず、鬼の数のみ減らすようにし、ルールの理解が深まるようにした。

【保育の経緯】

「タッチできたことが嬉しい」から始まり、「逃げ続ける最後の一人になった」・「最後まで諦めずに追いかけて全員タッチできた」など、自分に自信がついていった。また、タッチされて悔しい、タッチできて嬉しい、両方の気持ちに気づけた。



帽子の色で
チーム分け。

10数えたらスタート!

あともう少しで
タッチできそう!
がんばれ!

最後の一人を
タッチするまで
あきらめない!

【考察】

シンプルなルールでしっかり遊びこむことで、基本的なルールの理解を深めることができた。また、鬼になってもなかなかタッチできない子同士を集めて鬼にすることで、タッチすることの楽しさや全員タッチできた達成感などを感じられるよう工夫していった。ルールを守ることの大切さや、「タッチする/される」ことで相手の気持ちに気づくことができ、自分に自信がついていったことを実感した。



子どもが分かりやすい、
シンプルな遊びから
ルールを知ったり、友達
との関わりを深めたり
できますね。

友達との関わりを大切にしながら、 子ども主体で遊びを楽しむ

3歳児9月

栄光多摩平の森保育園

【子どもの姿・思い】

3歳児はなんでも自分で出来ると思い、怖いもの知らずの時期と言われている。だから、遊びの中でも“負ける”“途中で終わりになる”ことは納得できない。ゲームなどの遊びの中でも自分が満足するまで楽しむことが大切だが、みんなで行う時にはルールに縛られて一人一人が満足できないこともある。椅子取りゲームは座れないとそこで終わりにになってしまうため、つまらなくなって途中でやめてしまう子もいる。そこで、何とかみんなで楽しめる方法はないかと新しい椅子取りゲームを考えた。

【ねらい・意図】

子ども同士の心地良い関わりを簡単なルールのある遊びを通し楽しむ。“友達と一緒に楽しい”の関係を育んでいく。“あー楽しかった”“もっとやりたい”思いを育むために、エンドレスに続く遊びを楽しめるようにする。

【心掛けたこと】

ルールありきでなく個々の思いをくみ取りながら柔軟に遊びの内容やルールを変えることで誰もが楽しいと思えるよう遊びを展開する。

【保育の経緯】

ホールで人数分の椅子を並べ、少しずつ椅子が減っていくことを伝える。座れなくなったら座っているお友達の前に立って「おねがいします」と言って膝に座らせてもらう。あるいは復活ジュース屋(保育士が水筒の所において椅子に座れなかった子を待つ)に行って水筒の水を一口飲んで再びゲームに参加するルールに変えた。その結果、やりたくないと言ったり、途中でやめてしまう子が減り、楽しんで遊ぶ時間が長くなった。



あっ!座る
椅子がない!
膝にのせて!

何度もできて
楽しいね!

復活ジュースを飲
んだからもう一度
できるよ!!

【考察】

エンドレスに楽しめることで、誰もが最後まで参加でき、楽しさを共感できる。勝ち負けではなく、友達の膝に座らせてもらう喜び、座らせてあげられた優越感が持て、お互いが心地よく楽しい遊びになっていた。



年齢により、勝ち負けではなくみんなで最後まで遊べる工夫することは、子ども達の気持ちを汲むためには大切なことです。

和太鼓の取り組みを通して

5 歳児

芝原保育園

【子どもの姿、思い】

3歳児クラスから太鼓教室へ参加し、太鼓の音に合わせて体を動かしたり、簡単な童謡のリズムで叩くことを楽しんでいる。

4歳児クラスで《輝け囃子》を覚え、みんなで叩く太鼓の楽しさを知る機会を設けている。

5歳児クラスで、レベルアップした《ぶち合わせ太鼓》の演目に挑戦し、発表会にむけて取り組んでいた。

【ねらい・意図】

- ・クラス全員で協力して成し遂げる達成感を味わう。
- ・仲間と音を合わせることで協調性を身につける。
- ・力いっぱい太鼓をたたくことで、心地よさを味わい、表現力を身につける。

【心掛けたこと】

《輝け囃子》より難しい演目の為、一節ずつ丁寧に伝えていった。

集中が続かない子もいるため、同じ曲だけを繰り返すのではなく、他の曲を取り入れたり、色々なリズム打ちを取り入れ、楽しみながら集中力が保てる工夫をした。

研修を受けた職員が指導に入り、担任にもポイントを伝え、一緒に子どもたち一人ひとりに合わせた指導をしていった。

待つ時の姿勢は、
どうやったらもっと
かっこよくなる
か考えよう！

構えの時、バチは
まっすぐ上にして持
つとかっこいいよね！



【保育の経緯】

口伝をすぐに覚えられる子、覚えるのに苦戦する子、さまざまだが、なかなか覚えられない子に対しては、苦手意識を持つことがないように、「間違えても大丈夫！みんなでも楽しく叩こう！」と安心できる声掛けをしたりそれぞれの上達したところなどを褒めながら進めた。練習を重ねるごとに、「どうやったらもっとかっこよくたたけるか」「待ち姿勢はどんな感じが良いか」など、子ども自身が考え工夫するようになった。

【考察】

新しいことにチャレンジする時、ワクワクした表情で、目を輝かせて取り組み始める。保育者が、一人ひとりと向き合いながら丁寧に指導していくことで、上達していくことが嬉しいと感じ、向上心が芽生え、より楽しみながら取り組むことが出来ていた。

子どもたちの様子を見て演目を決め、発表会で披露した。仲間と一緒に成し遂げた達成感と充実感を味わうことができた。



和太鼓を通じて、楽しみながら友達との協調性を身に付けていけることもできます。年齢に合わせた演目も子ども達が無理なく取り組めて良いですね。

発表会で大切にしていること

上田せせらぎ保育園

当日、園長の挨拶で保護者へお話しした内容です。

「発表会は子どもたちの日々の生活の一部を切り抜いて見て頂く場です。子どもたちのありのままを見て成長を実感して欲しいと思います。緊張してしまうことも心が成長した証です。上手にできた、できないという出来映えを求めるのではなく、舞台に立つ子どもたちの成長と一緒に喜んで頂きたいと思います。

日々の保育と同様に発表会にもねらいがあります。

発表会を通じて様々な感情を経験することで、生活する上で必要な力を育んでいくのです。

子どもたちは褒められることだけでなく、「ドキドキしたよね」「わくわくしたよね」「頑張ってたね」と自分の気持ちを分かってくれる、認めもらえることに喜びと安心を得ることができます。保護者の方からのその言葉かけがあって、発表会における子どもの満足感、達成感も確かなものになります。ぜひ、出来映えでなく、お子さまの心の中を覗くように観覧いただき、子どもたちの育ちへの最後の励ましとして、お声をかけて頂けたら幸いです。」

後日、保護者から「感銘を受けました。」と多数のお声を頂き、保護者に私たちがこだわりをもって日々保育をしていることが伝わった、良い機会となりました。



行事を通して、保護者との間に子どもたちの満足感や達成感を共有できるといいですね。子ども達の成長を共に喜び合う機会にしましょう。

エコの架け橋

【子どもの姿】

「エコ(エコロジー)」の言葉が聞かれるようになり、「物を大切に」「給食を美味しく味わう」「自然に興味を持つ」をテーマに遊びやクイズで楽しみながら活動に取り組むことも増えた。

【ねらい】

自然に興味を持ち、物の大切さを考え、子ども達が楽しめるエコな活動を行う。

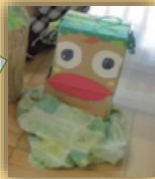
みなみだいり保育園

【心掛けたこと】

- ・環境学習の日を1歳児～5歳児まで設定して、年齢に応じた活動を遊びながら、わかりやすく伝える。
- ・行事に関連付けた取り組みを工夫する。

川をきれいにして(1～5歳児)

ベルウッドくんから葉っぱのお手紙が届きました。「ぼくの住んでいるベルウッド川がごみだらけだよ。たすけてー!」



ベルウッドくん



ベルウッド川

魚釣りをしながら、ごみを見つけたよ

川のごみを拾ってきれいになったね

土作りから野菜の収穫へ(4,5歳児)

野菜のくずを細かくします!



細かくした野菜くずを土に入れます!



ぼかし肥料を入れて、元気な土作り



大きな大根が取れました!



【考察】

環境学習の活動日には、水を大切に、電気を大切に、物の扱い方などテーマごとのキャラクターが子ども達を喜ばせてくれエコな活動の活力となっている。特に野菜づくりでは、土づくり体験から、種まき、野菜の収穫、調理して味わう経験を通して、興味関心、愛着を感じ、子ども達は、次の土づくりや野菜づくりを楽しみにしている様子が見られている。自分達が育てた野菜を残さず食べようと食への意欲も育ち、食育への架け橋となっている。1年間の終了日には、エコ免許をもらえ、頑張った子ども達の意欲へと繋がっている。小さなころから自然豊かな保育園での実体験が五感を育て、遊びながら心と体を元気に育ててくれていると感じている。



エコロジーとは、「環境や自然に優しい」という意味でつかわれています。身近な素材を使って子どもたちとエコについて学べるのは良いですね。

環境を整える大切さ

4歳児

もぐさ台保育園

【子どもの姿、思い】

周囲の刺激が入りやすく、落ち着いて生活することが難しい。友達にちょっかいを出すことも多く、最初は楽しく遊んでいたが、食事をしたりしていてもトラブルに発展してしまう。

そのため、日頃から注意をされ、自己肯定感が低く、ふてくされてしまうことも多い。また、「できない」「わからない」と口にすることが多く、クラスの活動に消極的であった。

【ねらい・意図】
落ち着いて過ごすことのできる環境の下、友達と一緒に楽しく過ごしていく。

【心掛けたこと】

- ・A君の自信を高めていくためにも、注意する回数を減らし、できた所を褒めて認める言葉掛けをした。
- ・「友達のことが好き」というA君の気持ちを汲み、無理のない範囲で一緒に過ごせることを優先して環境設定を考えてきた。
- ・関わる職員が共通認識を持ち同じ対応をするようにした。

先生、プニプニ貸して！

机は別だけど、みんなと一緒に。
食べることに集中できるよ。

スクイーズ
ボール



これを触っていると
落ち着くんだよ



【環境の工夫】

- ・椅子に座ると体が動いて友達にちょっかいをだすため、傍に保育士がついて背中や肩をマッサージをして落ち着かせた。また、担任の話を集中して聞けるように、掌に握ると柔らかく心地よい感触のスクイーズのボールを持つことを提案した。A君自ら、持ちたいと言ってくる場面もでてきた。
- ・食事の際、同じ机にいる友達の刺激が入りふざけたり、手で食べたり食べこぼしたりする。その都度、友達が不快な気持ちを訴えてくるが多かったため、A君用の机を友達の座る机の前に置いた。一緒に食べる楽しさを感じながらも、本児専用の落ち着くことのできる空間を作った。
- ・集中できる時間は短いので具体的に短くわかりやすく話すようにした。

※スクイーズ=柔らかく、フワフワした触り心地のおもちゃ

【考察】

マッサージをすると人の手の温かみが伝わったり、一定のリズムで撫でてもらったりすることで心地よい刺激が入り、安心して落ち着くことができていた。また、スクイーズを手にとると、その感触を手先で楽しむことに集中することができ、落ち着いて過ごすことができた。周囲の刺激に気をとられる回数も少なくなり、本児なりに聞こうとする姿勢が見られるようになった。

友達と一緒にすごしたいという気持ちを大切に、他児の机と本児の机を対面に並べて距離をとりつつも同じ空間に配置したことにより、疎外感を感じる事なく、落ち着いて過ごせている。注意される回数が減り、自己肯定感が少しずつ高くなり、楽しく過ごす姿が見られるようになった。また、気持ちが安定することで「できないから」「わからないから」やらないのではなく、少しでも頑張って取り組もうとする姿が見られるようになってきた。



その子その子に合った心地良さや良い刺激を見つけ、褒め、認めて自己肯定感を高めていきましょう。その為にも、良い環境を提供することが大切です。

固定の保育士が核となり、みんなで育む

3歳児

子どもの森あさかわ保育園

【子どもの姿】

◆入園時の情報

- ・A君はこれまで保育園の経験はなく、言葉を発することが少なかった。
- ・新しい環境に慣れるのに時間がかかっていた。



【ねらい・意図】

- ・職員間で子どもの情報を共有し、環境に慣れていけるよう保護者、子どもに丁寧に関わることを確認する。
- ・発語の促しやコミュニケーションが取れるようになる為に援助や配慮をしていく。



【心掛けたこと】

- ・興味を示した遊びや活動の場面などでは、たくさん話しかけて語彙を増やしていく。
- ・無理強いしない。
- ・興味があることには保育士も一緒に関わる。
- ・できることが増えた時には一緒に喜んだり、友達と上手に関われなかった時には悲しんだり気持ちに共感し、表情豊かに接していく。



【保育の経緯】

新しい環境に慣れるまでに時間がかかった。担当保育士が寄り添い、思いを汲んでいくことで少しずつ保育園の生活に慣れていった。保護者から好きなおもちゃを聞き、友だちや担任、異年齢児と関わる時間も増え、楽しんでいる様子や笑顔が増えていった。集団生活の中で語彙も増えていき「やらない」「いらない」「いいよ」「おもしろい」など簡単な言葉で気持ちを表すようになった。

半年が経ち、運動会や発表会など大勢の人の前に出ることはまだ難しいが、パズルや絵本、車など好きなもの、好きな遊びを見つけ担当保育士が見守ることがなくても、友だちと関わったり、遊んだりできるようになり笑顔もたくさん増えていった。

新しい活動やいつもと違う環境などでは、まだ不安な様子を見せるが、子どもたち、担当保育士、担任をはじめ全職員が声をかけ、気にかけて、出来たことを褒めていくことを繰り返すことでどんどん笑顔が増えている。

【考察】

初めは泣いてばかりで意思疎通が出来ず、働きかけに試行錯誤したが、ゆっくり関わることで少しずつコミュニケーションが取れるようになった。友達や保育士も話しかけたり、共感する中で成長を感じることができ、保育士の意識や保育園の環境の大切さを日々感じている。



集団生活の中で、たくさんの言語や感情に触れ、周囲に温かく見守られることで、安心して保育園生活に慣れていくことができますね。

みんなが心地よくつながるために

豊田保育園

【子どもの姿、

クラスの様子】

Aちゃんは自己主張が強く、遊びの中でも友だちと関わりを持つのが難しい。例えば、自分の遊びを邪魔されたり、遊びの中で友だちとイメージを共有できない場面になると、怒りが収まらなくなる。大きな声や独自の行動に周囲の子ども達も引きずられてしまい、結果クラス全体が落ち着かない状況になってしまう事がある。



【保育のねらい】

Aちゃんの良さを認めながら、友だちとの関わりを育てられるクラス運営を実現する方法を探り、Aちゃんを含めた穏やかなクラス運営を進める。

【心がけたこと、園の取り組み】

担任の申し出で、職員によるカンファレンスを実施する。Aちゃんの様子、クラスの様子、担任の悩み、それぞれを全員で共有する。他職員が関わった時のAちゃんの姿や、それぞれの経験談などを話し、方法等を探ってみる。担任は、カンファレンスで保育のヒントをもらい、実践してみた。

【保育の経緯】

■子ども達が落ち着いて好きな遊びを楽しむ

保育室内に遊びのコーナーを作り、子どもの声を聞きながらおもちゃを選び、子どもと準備する。小さな遊びのグループが出来る。

■Aちゃんと友だちの遊びを仲立ちする

遊びたいものや友だちを聞き一緒にグループに入る。同じ遊びを通して遊びの共有を感じられる様仲立ちする。

■コーナー作成後しばらくすると

それぞれが好きな遊びに集中できやすくなった様子で、クラス全体が落ち着いていった。担任は、気持ちに余裕を持ってAちゃんに接していく事が出来、Aちゃん自身も自分の遊びを邪魔されることが減ったことで、少しずつ友だちとの遊びを楽しめるようになっていった。

■担任をバックアップする

他職員が保育の場面により補助に入る時間を作り、子ども達への声掛けなどを実践する中、担任の気づきを引き出してみる。巡回相談で、アドバイスを受け職員全体の学びとする。



カンファレンスの様子



テーブルで遊びを分けてみる

子ども達が落ち着いて好きな遊びを楽しめるようにしたいし、Aちゃんにも友だちとの関係を楽しんでほしい。



【考察】

職員によるカンファレンス実施で得るものはとても大きく、保育のヒントを得、実践してみることで保育の振り返りが出来る。Aちゃんを含めた子ども達への配慮へとつながる。他職員と悩みが共有出来たことで、協力も得られ、担任の悩みも軽減する。担任の笑顔は、子ども達の笑顔につながり、保護者の安心の笑顔につながっていく。



担任が一人で悩まず、相談できる環境作りが大切ですね。職員みんなて悩みを共有し、解決に向けて取り組みましょう。

気になる子どもの対応について

たかはた台保育園

【大切にしていること】

担任以外の職員とも情報を共有し子どもの様子を把握し対応する

情報の聞き取りと参観

各クラスから気になる子どもをあげてもらい、その子どもについてファシリテーター（会議を円滑に進める役割を担う人）が聴き取りを行う。

その後、そのクラスにあまり関わることのない職員が、その子どもの参観を行う。参観後は、感想などを記入する。

園内カンファレンス

すべての参観が終了したら、園内カンファレンスを行う。

園内カンファレンスでは、ファシリテーターを中心に付箋を使用して会議を行う。

担任から気になる子どもの様子を話してもらい、次に、2～3人のグループに分かれて、その子どもの気になる行動を付箋に記入する。

記入した付箋を大きな紙に貼りながら、同じような内容の出来事をまとめていく。

集約

先程のグループで話し合いながら、気になる行動についての対応などを付箋に記入していき、これを大きな紙に貼りながら、グループごとに意見を発表する。

ファシリテーターが各グループから出された対応などを同じような内容ごとにまとめ、最後に担任の意見を聞き、今後の保育の進め方について、職員全員の共有ができる。

考察

職員全体で子どもの様子や発達などを共有することで、担任以外の職員とも関わりが広がり、朝夕保育の時間帯にも同じ対応ができる。また、保護者への対応も統一できるので信頼関係へ繋がっている。

【職員の声】

- ・子どものいろいろな行動に気づかされると共に、いろいろな保育の方法を学べる。
- ・カンファレンスの仕方を学ぶことができる。
- ・いろいろなクラスの担任が情報を共有することで、朝夕保育に活かせる。



みんなで情報を共有することで、子どもが安心して成長できる環境が整います。保護者も安心しますね。

食物アレルギー児の行事食や安全

日野駅前かわせみ保育園

【ねらい、意図】

アレルギー児自身（特に幼児）が自分が食べることができない食材を理解し、就学に向けて自己管理ができるようにしていく。

【保育の経緯、心掛けたこと】

献立を読み上げるなど聴覚情報の他に食器の色をかえるなど視覚情報も取り入れ、普通食とアレルギー食の差を明確にした。行事食では代替食でも楽しむ事ができるような工夫をしていたことで食べることが出来ないものがある中でも他児と一緒に食や伝統などに興味を持つことが出来た。保育士をはじめ、関わりのある大人（非常勤職員や実習生など）にも情報をしっかりと共有する。

食器は色をかえ、指定のお盆に載せてお盆ごとアレルギー児の席に配膳する。



節分おやつ
オニ蒸しパン



アレルギー児対応
オニおにぎり

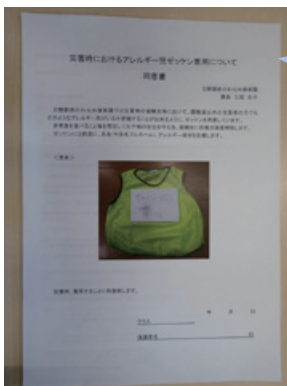
【考察】

食物アレルギー児だけでなく同じクラスの子どもたちにも食物アレルギーについてわかりやすく伝え理解してもらう事で『食物アレルギーがあることで食べられないものがある人もいる』ということを知る良い機会になる。

乳児では特定の保育者が担当するなどの取り組みをしている。

【園外での安全】

震災時など園外の避難場所へ移動した際、園で用意している非常食は全てアレルギー対応食にしているが、避難場所には様々な人が集まり支援が行われることもある為誤食提供などに繋がることないように避難時にはアレルギー児はゼッケンを着用している。



ゼッケンを着用するため、個人情報の保護を目的とする保護者からの同意書

園全体でアレルギーの理解を深めながら、アレルギー児も楽しく食事ができるよう、工夫をしていきましょう。



導尿の必要な子どもへの対応と保育

ひらやま保育園

【保育のねらい・意図】

- ・脂肪脊髄膜瘤において両下肢麻痺、膀胱機能障害により、導尿が必要である子どもの入園が決まる。導尿は医療行為にあたるため、看護師が常駐していない園であったことから、訪問看護ステーションを活用し、看護師派遣業務での対応となる。
- ・子どもにとっては初めての集団生活となるため、安全安心に園生活が送れるよう配慮する。

子どもの姿 思い

- ・2歳児クラスで入園 下肢以外は年齢相応の発達 明るい性格、友達が大好きで入園を楽しみにしていた様子であった。
- ・足に装具を付けている、立位はしないが膝立ちで移動する。

入園前

- ・入園前に保育課担当の看護師から病気や導尿について職員が学び、理解を深めた。
- ・膝立ちで移動できるスペースを確保し、室内環境を整えた。

保育の経緯

- ・本児独自の〈おたより帳〉や〈訪問看護の処置簿〉などを使って保護者との連絡のやり取りを毎日行っている。
- ・保育活動や行事などの参加方法をその都度確認し合い、本児に合わせた対応をしている(例えば運動会競技の参加の仕方など)
- ・友達には本児の装具は大切なものであることを伝えたり、本児にも装具が友達に当たったりしないように伝え 配慮している。

入園後

- ・下肢麻痺があるため安全に過ごしながらも、保育園の楽しさを味わえるようにしている。
- ・保育室内で安全に過ごせる場の確保、処置を行う場所は不安なく楽しい感じの雰囲気作りなど環境設定を進めてきた。
- ・緊急時の対応、災害時の避難経路などを職員間で確認している。
- ・職員間の情報共有の為の会議や保育課担当看護師と訪問看護ステーションを交えた会議を定期的に行っている。

【考 察】

- ・保護者との信頼関係と主管課・主管課担当看護師・訪問看護等 関係部署との連携が大切である。
- ・保護者との面談は園長・保育課担当看護師・担任で行い、引き続き情報共有や保護者支援を行っていく必要がある。
- ・安心安全に過ごし、保育を進めるために、安全管理や衛生面の配慮を励行した。
- ・医療的ケア児の受け入れは初めてのことであるが、病気について職員が学び、専門的な知識を身につけながら、本児にとってより良い成長を園全体で支えていく意識をもつことが大切である。



全職員と、関係機関と連携し、信頼関係をより深めていくことが大切ですね。

I 型糖尿病を持つ子どもへの理解と保育

日野保育園

【ねらい・意図】

I 型糖尿病という病気を理解し、保育の中で配慮することを知り、
保護者・かかりつけ医・保育園と連携を取り保育する。

子どもの姿

2歳児クラスに入園した。常にポンプを腰に付けたポーチに入れて身に付けており、そこからインスリンが注入されていた。活発ではあったが入園当初は低血糖で休むことが多かった。5歳児になると子ども自身が病気の理解をしており、職員の見守る中血糖値測定を行えるようになった。ポンプの操作も保護者に電話(スピーカー)で指示を仰ぎ、自身で操作できるようになった。(着脱は看護師が行う)

心掛けたこと

活動内容によっては低血糖になることもあるので、事前に一週間の予定を保護者に渡し、登園前の血糖管理をお願いした。活動中に低血糖になった時はポンプのアラームが鳴り、活動を中断しなければいけなかったり、別の部屋で補食を取ったり、時間によっては給食を血糖値の上がりやすい物から食べたりするため本見の思いとは異なる行動になることもあった。そのため本見の気持ちに寄り添い関わっていった。

保育の経緯

入園決定後、園長・看護師・クラスリーダーがかかりつけの病院まで行き、病気について園での生活で気をつけていくことなど聞き、**ポンプの操作は医療行為**に当たるなど全職員に周知した。ポンプを付けたまま過ごすため他児に触らないよう伝えた。本見自身が自分の病気について理解していったので、体の状態を言葉で伝えられるようになった。

【考察】

何より、保護者との連携を密にしていた。保護者が不安に思っていた集団での生活や他児との関わりについても、保護者会で保護者や子どもたちに向けて保護者が作成したパネルシアターで病気の症状や周囲の配慮事項について行い、理解してもらうことで、保育園での生活が安心・安全に過ごせるようにしていった。また、**病気を持っているからと活動を制限することなく**クラスの一員として過ごせるようにできることを考えていった。血糖値測定やポンプの操作は本見自身でも行っていたので、就学してから変わらず生活できるように小学校や学童とも連携をとっていった。



【I 型糖尿病について】

I 型糖尿病とは、主に自己免疫によっておこる病気です。

自分の体の中でインスリンを作ることが出来なくなってしまう、インスリンがないとブドウ糖(グルコース)を細胞に取り込む事が出来ず、高血糖になってしまいます。そのため I 型糖尿病では、インスリン分泌を補うために自分自身で血糖値を測定し、インスリン注射を行う必要があります。注射の方法としては、頻回にインスリンを自己注射を行うか、携帯型のインスリンポンプを用いてインスリンを持続的に注入する方法で行います。

II 型糖尿病のように食事療法によって治るような病気ではありません。

点滴・服薬を必要とする子のための環境づくり

5 歳児

わらべ日野市役所東保育園

【子どもの姿】

- ・入園前にデイサービス等の集団生活の経験があった為、保育士や友達とすぐに打ち解けることができ、安心して生活する姿が見られる。
- ・何でもやってみたくて意欲的であるが、思いと体が伴わないことも多く、悔しい気持ちを前面に出す姿が見られる。
- ・通院中であり、点滴や服薬が必要なことや友達とは違う給食を食べること等に対して、ある程度納得している様子が見られる。

【ねらい・意図】

- ・友達との触れ合いを楽しみ充実した保育園生活を送る。
- ・服薬や点滴をしながら登園する中でも、できることから自分の身の回りのことを積極的にを行い、健康で安全に過ごす。

【心掛けたこと】

- ・本児のことを全職員で情報共有した。また、クラスの友達にも説明し、点滴や、服薬、食べられない食材があっても決して特別ではなく、皆で仲良く過ごせるように伝えた。
- ・点滴リュックを置くカゴや手洗い場の台などの必要物品をそろえ環境を工夫し、できるだけ友達と同じ経験ができるようにした。
- ・すべてを手伝うのではなく、自分で気づいたりやってみたくて気持ちを大切にしたりしながら見守るようにした。

【保育の経緯】

- ・クラスの子どもも本児への理解を少しずつ深めていった。保育中にアラームが鳴っても気づいた子どもからすぐに保育士に伝えられる雰囲気がクラスにできていった。
- ・活動中に服用しなければならない回数も多かったが、準備したものを自分で上手に服用できるようになった。
- ・食べられない食材については保護者と確認しながら提供した。就学に向けて、自分で除去する練習も積極的に行っていた。
- ・日々の様子などを保護者に伝え、保護者と共に体調には十分注意していった。
- ・自分で自分のことを守る気持ちが芽生え、難しいことがあっても前向きにとらえ積極的に多くのことに挑戦できるようになっていった。

【考察】

点滴をしながら登園する子どもの受入れは初めてだったが、保護者そして全職員との連携を密に行い、本児とその保護者も共に安心して保育園生活を送れるよう努めた。クラスの友達も、本児の点滴や服薬が必要であることを理解し、だからと言って特別ではなく、皆と同じ友達といつかかわりを持って過ごすことができていた。給食は友達とは違ったものであっても、保育士も同じ机に着き、皆と一緒に会話を楽しみながら食べることができていた。就学に向けて、小学校教員が子どもの様子を見に来るなど連携を取った。



医療的ケア児が安心して保育園生活を送れるよう、クラスの子どもも点滴や服薬について理解することで、皆同じ友達という意識を持って関われますね。

廊下の曲がり角

日野保育園

【子どもの姿、思い】

トイレが部屋にないので、個々にトイレに行く、行き帰りでトイレ前の角でぶつかる姿があった。幼児クラスの給食の時間と重なると大人が運ぶ食缶にぶつかることもあった。

【ねらい・意図】

幼児クラスの子がトイレに行く際、曲がり角でぶつかり怪我をすることがあったため、対応方法を考える。

【心掛けたこと】

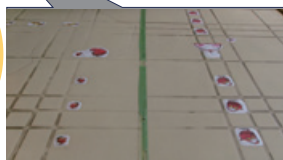
大きな事故(怪我)になる前に会議で話し合い、廊下の中央に線を引き、行き帰りの道を作った。ただの線だけだと、わかりづらいので、動物の足型で向かう方向を印した。



動物の足跡をたどって行けば、他の子とぶつかることはないよ。今回は、だるまさんの上を歩くようにしたよ。



子どもたちに伝える際、保育士が先頭を歩き、絵本のセリフを言いながら歩く場所を伝えるようにした。すると、子どもたちだけで行くときにも「だるまさんと…」と楽しそうに声にだして歩いていました。



【保育の経緯】

子どもたちがトイレに行く際、保育士がその都度ついていくことができず、歩いていくようにと声を掛けていた。それでも、遊んでしまう姿があり怪我につながっていた。廊下に線を引くことで歩く場所が分かり易くなったので角でぶつかるということがなくなった。また、足型やキャラクターを貼ることで子どもたちはその上を辿り楽しんで歩く姿もあった。

もうお友達とぶつからないよ。



【考察】

角でぶつかって怪我をすることも多かったので、クラス単位でトイレに行っていたこともあった。しかし、トイレの数やトイレを済ませた子の待つ時間などを考えた時に、どうしたら安全に行き帰ることができるか話し合いを行い、廊下に線を引きということになった。床に貼った動物の足型なども見慣れてくると子どもたちは違うところを歩くようになるので、定期的に変えるようにする。



子どもの目線に立って物的環境を整えることは、事故の未然防止にとっても大切なことですね。

整えられた清潔な環境を用意する

ひよこハウス豊田

【子どもの姿・思い】

室内を分けたことで、活動エリアで遊んだ後「お食事」の声かけをすると手洗い後、自分から食事エリアの自分の席に座り食べる姿があった。また食後も睡眠エリアの自分の布団に行き、横になる姿があったり見通しをもって移動したりしていた。

【ねらい・意図】

- ・運動の欲求をしっかり満たすことのできる遊空間をつくる。
- ・室内をエリアに分けることで、そこで何をするか決め、またどこで何をするか決めることで子ども達が安心して過ごすことができるように、そして物的環境に対して「ここが好き」という基本的な信頼がもてる空間作りをしていく。

【心掛けたこと】

- ・子どもの発達や自立に合わせ遊具や教材を定期的に入れ替えをして知的探求心を深められるようにした。
- ・目的に応じて、連続性を保ちながら子どもの発達段階に応じて設定を変えていった。
- ・自立の意欲に応える空間作りを行った。



睡眠エリア

食事エリア

活動エリア

（乳児保育室）

食事・排泄・睡眠・遊びなど一人ひとりの欲求に応えることのできる環境



（幼児保育室）

縦割りクラスの中で、年少が無理なくスムーズに異年齢に溶け込んでいけるように、遊具棚や遊具の配置をする



（棚の中の遊具）



【保育の経緯】

各年齢の運動発達をしっかりとえ、食事などの生活や、基本的運動・指先の基本運動など、1人1人の観察をして、自立を促し（基本的生活習慣の自立も含め）遊具の提供をして、知的探究心を深めることができた。文字の習得や数の概念については、3才児から興味をもち始めた。5才児においては就学へとつなげることができた。観察をすることで、遊具・教具の難易度を変えて設定した。

【考察】

子どもの姿を観察し支えていく為に、どのような配慮が必要かを話し合い、保育者の関り方をその都度検討しあう。保育者の世話の仕方・言葉かけ・仕事の観察の仕方など方向性を同じにすることで、子どもは見通しをもって行動することができた。生活や遊びの中で、困っている時、不安を感じている時に「どうしました・お手伝いすることはありますか」と「お手伝いしてほしい時は言ってくださいね」と、言葉かけをしていき、1人1人自信をもって自分が出来ることが多くなり、遊びの面でも、完成を喜び子ども達は満足感を味わう。



保育環境を整えることで、子どもが主体的に生活できるようになりますね。

子どもが自由に玩具を選べる環境 1・2歳児

マジオたんば保育園日野ルーム

【子どもの姿、思い】

これまではコーナー保育として、保育士が玩具を選んでいました。遊びに飽きた子たちは走りまわっていました。

【ねらい・意図】

子どもの意思を尊重するという視点から、子ども自身がその時に遊びたい玩具で遊べるようにする。

【心掛けたこと】

- ・カゴは柔らかい生地のもので、物を使用することやテプラを貼る、子どもが片付けの場所が分かるように工夫している。
- ・下段はその時の子どもの興味のあるものを配置し、上段は子どもの要求に応じて取り出す。

おまごとのキッチン台等、カゴに入らない大きな玩具は、押し入れの中に入っているため、使いたいときに子どもたちが、保育士に声を掛けて出してもらっています。



【保育の経緯】

好きな玩具で遊べる楽しさから「今日は〇〇で遊ぶ!」と身支度を頑張ったり、遊びを通して子ども同士の関わりが増えたように感じる。

【考察】

子どもが自分自身で玩具を選び遊ぶことで、満足感を得ながら過ごすことが出来る。現在はラベルのみで場所を示しているが、今後は一目で分かるよう玩具の写真を貼るようにしたいと思っている。また、棚から少し出して遊ぶ子や玩具棚周辺に玩具や子どもが集まりやすくトラブルもあるので、コーナー遊びができる環境が必要と考える。



使いやすいね。



自分でおもちゃを出して遊べる環境作りは、子どもの主体性を育てますね。楽しく遊ぶ姿が想像できます。

丁寧に関わることにこだわる

豊田保育園

豊田保育園は、1歳児からの保育園です。

毎年4月には1歳児16名が入園してきます。そのほとんどが、ご家庭から初めて保育園に入園し集団を経験する子どもです。

年度の初めはひとき大きな泣き声が1歳児室から聞こえて来ます。初めての環境での不安は痛いほど伝わります。そのつづらなひとみが「誰がだっこしてくれるの～」と訴えているようです。

また、この年齢はかみつき・ひっかきなども多いだけに丁寧に関わりが求められます。

1歳児は月齢の差が大きく、すてによちよちと探索を楽しみ、何やらおしゃべりする子どもから、ハイハイでの移動や、まだ午前中に睡眠が必要な子どもなど、成長や生活時間もまちまちです。そこで、豊田保育園では、1歳児の保育室を区切り8名ずつのグループ保育を行っています。

自園では、保育士の配置は子ども4人に対し保育士1人を配置し、8:2としています。区切った保育室は決して広くはありませんが、区切られたことで保育士は子どもの様子や変化に気づきやすくなり、4人掛けテーブルに保育士1名で食事介助が出来ます。その子に向かってしっかり声を届けることにもつながっています。また、入園前面談では、保護者より家庭での生活リズムや食事・午睡等の様子を伺います。そこで聞き取った家庭での生活リズムに合わせて、園生活をスタートします。個々の生活リズムに合わせて午前睡を行い、おむつが濡れたら交換していきながら、無理なく園生活に慣れるように整えていきます。園に慣れ笑顔を見せるようになってきたら、お互いに刺激し合いながらお隣のグループとも交流し遊びを広げます。

2歳児クラスへの移行を踏まえ、2歳児クラスの4月の様子（新入児を迎えることで1グループの人数が増える/新入児は園に慣れるまで援助が必要/進級児は自分でしようとする気持ちがある、など）を職員間で情報交換し、1歳児クラスの3月末に目指す姿として保育計画を立て、保育をすすめます。

1歳児の小さな集団（グループ）で進める保育の体制は、保育園運営のこだわりとして継続し、子ども達との関わりを丁寧に築いて行きたいです。



初めての保育園生活を過ごす1歳児にとって、より安心して過ごせる配慮として、丁寧に声を掛けやすく、目を配りやすい小グループでの体制が安心して過ごせる環境となっていますね。

自分たちの生活を自分たちで作る

3・4・5歳児グループ

栄光保育園

【子どもの姿】

3・4歳児は、年長児が太鼓を叩く姿や荒馬踊りを踊る姿を見て、大きな憧れを抱き、真似をして遊びたいと、年長児の輪に入って遊ぶ姿がある。年長児は、年下の子達のお世話を喜んでする姿がある。

【ねらい・意図】

- ・子ども同士で役割分担をしながら生活の流れを把握し、基本的な生活習慣を身に付ける。
- ・生活や遊びの決まりを友だちと一緒に話し合いの中で作り、守る。
- ・年長児に憧れの気持ちを持つ。
- ・年下の子どもの面倒を見ながら労りの気持ちを持ち、誇りと喜びを感じる。
- ・異年齢で生活する事を通して、社会性や協調性、思いやりの気持ちを育む。

【心掛けたこと】

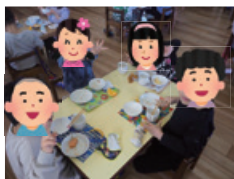
- ・保育士も一緒に生活しながら、子ども同士の関わりを様々な立場で見守り、援助する。
- ・各年齢の成長段階を踏まえた多様な活動を用意する。

【みんなの憧れ!和太鼓を叩く年長児】



年長さんのぶち合わせ太鼓、僕も・私もあんな風にかっこよく叩きたいな〜!

【異年齢で給食を食べる子ども達】



お兄さん・お姉さんの姿を真似していたら、上手にご飯が食べられるようになったよ!

【保育の経緯】

近年では少子化の影響もあり、きょうだいや異年齢での交流が少なくなってきた。そのような背景から幼児を異年齢2グループに分け、生活や活動を共にしている。グループ内では異年齢の8つのチームを作り、年長児がリーダーとなってチーム内をまとめている。思いがぶつかり合うこともある中で様々な考えを知り、認め合い、優しさや思いやり・社会性や協調性を育てているように心がけている。

子ども達の気持ちが通じ合えるような仲立ちをしています。



【考察】

年長児は、年下の子どものお世話を経験しながら、相手の気持ちになって考えたり、人の役に立てた経験が自信に繋がったりしている。また、年下の子ども達は、自分がお世話をされた経験が、今度は自分もお世話をしてあげたいという気持ちに繋がっている。異年齢で支え合い、教え合いながら、「自分たちの生活を自分たちで作る」というねらいに結びついている。

年齢を超えた思いやりの気持ちが育っていることを感じます。



異年齢交流を通して、自然に助け合う気持ちや憧れる気持ちが育っていますね。



担任編成・子どもへの働きかけ

至誠いしだ保育園

【ねらい・意図】

- ・保育の環境の調整:物質的環境の調整とともに、人的環境を整える。
- ・保育の質の向上と職員定着。
- ・クラス編成、担任数の変更による成長発達に合わせた教育、保育と、横割り、縦割り活動の良さを活かした保育の実践。

子どもの姿

【横割り保育は・・・】

- ・横並び一斉保育になりがち、活動は平均的になり個々の子どもの成長発達に合わせにくい。
- ・1クラスの園児数が多く、一斉に動かすのは担当者の負担が大きい場合もある。
- ・担当を複数置いても混乱することがある。

【縦割り保育は・・・】

- ・個々の子どもの成長発達に合わせやすい。個別の活動も始めた。
- ・1クラスの園児数が少なく担当者の負担が小さいことも多い。
- ・成長発達に合わせた担当者により子どもの自発的な活動を認めながら楽しむことができている。

心掛けたこと

- ・子どもの姿、職員の成熟度に合わせ、事業計画、環境整備の予算を立てた。
- ・クラス編成は複数年をかけ、徐々に変更していった。
- ・担任編成は、縦割り、横割り担当のほか、1階、2階のフロア担当、個別活動の担当を配置している。
- ・職員のキャパシティに合わせて大小の集団、目的を持った集団など様々な視点から担当することで相互的補完をすすめ、支えあう関係を構築している。
- ・担当を分散、役割に応じて任命することで、担当と業務の範囲を明確化し、負担と責任の集中を回避している。

保育の経緯

- ・各クラスに室長(クラスの主担当)と副担当をおき、それぞれ他クラス混合の横割り活動を分担する。
- ・年齢児だけでなく、おおよそ0歳、1・2歳、3から5歳を3つのグループに分け、それぞれ子どもの成長発達に合わせて集団、個別の活動をしている。
- ・集団活動が不得手な子ども、成長発達に配慮が必要な子どもの計画的なスポット活動を、2~3名のグループ活動として実施している。

【考察】

現在までに設備の整備を進め、縦割り保育を中心に、活動の自由選択を維持しつつ、クラスを増やしたため、担当する職員数は増え、1クラスの園児数が少なくなった。

子どもの個別活動を主に、成長発達に合わせた教育、保育と、横割り、縦割り活動の良さを活かした保育は、いきいきとした子どもの姿、保育活動の向上がみられている。

今後も年齢による横割り活動から成長に合わせた活動を展開したい。



保育の形態は、子どもの成長、発達に合わせて考えていくことでメリットが見出せますね。縦割り保育など多様な保育形態から得られる子どもにとってのメリットを、職員が意識しながら生活することが大切です。

学童交流

5歳児 | 2月

つくしんぼ保育園

【子どもの姿、思い】

卒園後、入学前から学童クラブを利用する子どもが多い。

期待感を持つ子どもがいる一方で、慣れない環境で1日を過ごすことに対し不安を感じている子どもがいる。

【ねらい・意図】

就学に向け、学校だけでなく、子どもにとって身近な存在になるであろう学童クラブについて、知る機会を設ける。学童はどんなところか、何をするのか、などを体験したり、学童職員と交流することで、利用することを楽しみにしたり不安の軽減につなげる。

【心掛けたこと】

学童クラブは楽しいところだと感じ安心できるような交流を計画する。不安を感じている様子の子の中には、そばについて安心して交流に参加できるようにした。

学童の中がどうなっているのか
わかった!

遊ぶものがたくさん
あって、学童に行くの
が楽しになった。

先生たちが優しく
おもしろい。



【保育の経緯】

- ・学童クラブの職員と事前に打ち合せし、流れを確認する。
- ・保育園から学童まで徒歩で行くため、踏切や横断歩道の渡り方など改めて交通ルールを学ぶ機会にもなった。
- ・交流では紙芝居で学童での過ごし方を聞いたり、実際にトイレを使わせてもらったりした。本やおもちゃなど様々な遊びがあることやおやつが出ることに子どもも喜んでた。

【考察】

学校が始まる前にスタートする学童生活。「どうやって行くの?」「どんなことをするのか?」と未知の世界に不安を感じていた子どもも交流後には、「学童って保育園みたい!」「おやつも楽しみ」と期待に変わったようだった。体験を通して知ることによって具体的にイメージができ、不安の軽減に繋がったのだと感じた。また、職員同士で子どもの姿の共有をする時間があり、卒園児の様子を聞くことができた。

帰園後、子ども達に感想を聞き、どこの学童にも優しい先生やお兄さんお姉さんがいること、たくさん遊べることを話しました。



就学前に交流を持つ経験から得られた安心感や自信は、新たな世界に踏み出す力になっていますね。

小学校ってこんなところだよ

5歳児2月

日野第二保育園

【子どもの姿、思い】

保育園で小学校の話題が出たり、家庭で就学の準備を進めていく中で、小学生になる期待を持つ子もいれば、新しい環境に対して不安を感じる子もいる。

【ねらい・意図】

交流経験を通して、小学校への親しみをもち、就学への不安を取り除く。



実際に椅子に座って授業を受けたよ！

お兄さん・お姉さんと一緒に校庭で遊んだり、トイレを案内してもらったりし、笑顔で授業を受けていました。

保育園という安心出来る空間の中で授業の楽しさを感じていました。

小学校体験(上記写真)
出前授業(下記写真)



百玉そろばんを使って
「かずあそび」



太鼓を使って
「ことばあそび」

出来る事が楽しい！
嬉しい！

【心掛けたこと】

就学前に小学校がどんなところか、保育園との違いを見つけて、興味が持てるように話をしていく。

【保育の経緯】

近隣の小学校の先生と就学に向けて期待を持てるような交流を行えるよう、連絡をとった。子どもたちから実際に小学校の何が知りたいのかを聞き、トイレや校舎内、校庭を案内してもらえるようにした。

【考察】

小学校体験をしたり、小学校の先生が保育園に来てくれる出前授業を経験したりし「楽しかった」「早く小学校に行きたい」という前向きな気持ちになっていた。



就学前に道路の歩き方を再確認しています。困った時に助けてくれる「ピーぷくの家」を伝えています。



小学校との交流や出前授業などの体験を通して、就学に向けた期待感や学校生活に向けたイメージを持つことが出来ますね。

ゼロからのスタートじゃない！

幼児教育・保育アドバイザー

【スタート カリキュラム】

【一律一斉から 多様な学びへ】

均質な子どもたちで成り立っている集団であれば、指導者は、計画通りに、容易に学習を進めていくことができる。そのために、小学校はイスに長い時間座ることなどの学習規律や名前の読み書きや数の理解などの前倒しを求めていた。

今は、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれたことが、各教科等における学習に円滑に接続されることが大事であり、均質から多様へと、今後も幼保小連携の実践を重ねていく必要がある。

- ・できないことは無理に早く始めない
- ・できることは教え込まずにどんどん進める



初めての給食当番
時間をかけてゆくりと

(日野市立日野第一小学校)

遊びを通してたくさん
春を見つけよう

【様々な姿を示す子どもたち】

多様な子どもがいるなかで生活した経験のある子どもが、20年後大人になって、多様性を理解し尊重することの重要性を発信していこう。保育者はそのために、一人一人の幼児の特性を丁寧に見取り、適当な環境を整え、遊びを通して教育を進めている。かつてのように小学校の先取り、前倒しの必要はない。長い時間座れなくても、平仮名が書けなくても読めなくても、小学校生活のスタートに影響はない。

今、多様な子どもと苦労の毎日を送っていても、20年後の社会に必ず返ってくると信じて、特性に応じた質の高い保育をめざそう。



がっこうたんけんの
はっぴょうをしよう

(日野市立日野第一小学校)

幼児教育・保育アドバイザーからのメッセージ

小学校では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導を工夫して、学校生活をスタートさせています。幼児教育施設では幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、日々遊びに没頭する保育を心がけてください。小学校のスタートは決して「ゼロからのスタート」ではありません。

就学に向けて、特別なことはやらなくていいんだよという小学校からのメッセージは、子ども達も、保護者そして保育者にとっても不安を拭ってくれますね。



太鼓で育む人とつながる力

5歳児

栄光平山台保育園

【子どもの姿、思い】

創立以来、和太鼓に触れてきていて、5歳児になると「荒馬踊り」「ぶち合わせ太鼓」を行事で披露している。日野市の「平山季重まつり」でも披露する機会をもらい、姉妹園で共通の目標に向かって合同練習を楽しんでいる。

【ねらい・意図】

姉妹園の子どもたちとの交流により、人とつながる力を育むことができるよう、お互いの園を行き来し名前を覚えたり声を掛け合う。

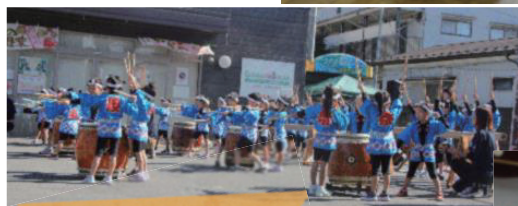
【心掛けたこと】

姉妹園が連携し、それらの機会づくりを充実させていくことが必要と考え、「ぶち合わせ太鼓」を何よりも楽しみ、無理のないように、進めていく工夫をした。



【保育の経緯】

ぶち合わせ太鼓だけでなく、運動会では「荒馬踊り」を両園ともオーニグで保護者に披露し、職員もその方よりワークシッのオアをいただき直ぐに姉妹園へ声を掛け、合同でワークシッを楽しむ事となる。



平山季重まつり



【考察】

法人間で連携を図り、事前に子ども達がより楽しめる内容の確認やグー編成などを話し合い、子ども達が主体的に楽しむことが出来ている。今回は、4歳児も参加し、来年度へ繋げることが出来た。



みんなが同じ目標に向かって頑張ることで、子ども達の絆が深まる法人内交流の一例です。それぞれの園で取り組める、他園との交流を考えてみましょう。

年長児交流会

しせい太陽の子保育園

【子どもの姿、思い】

卒園するとそれぞれ違う小学校へ入学する子どもたち。今までの保育園という小さな集団から小学校という大きな集団に環境が変わることでも不安を感じる子どももいる。

【ねらい・意図】

同法人の6園の年長児同士が交流することで、新しい友達と出会う喜び、楽しさを感じ、就学に不安を感じている子ども楽しみに思えるようになる。

【心掛けたこと】

「じゃんけん列車」では同じ園の子ではなく違う園の子とじゃんけんするよう声掛けをし、なるべく他園の子どもと関わりが持てるよう配慮した。

【保育の経緯】

就学を来年に控えた年末、行事などがない時期として12月を選んだ。

はじめは同じ園の子ども同士固まる姿も見られたが、徐々に他園の子どもにも興味関心を持ち、自然に会話が始まったり、関わる姿が見られた。



まずは各園の自己紹介とあいさつで始めました

じゃんけん列車でいろいろなお友達とじゃんけんぼん!



【考察】

子ども同士が新しく関わりを持てるようじゃんけん列車を行い、だいぶ場がなごやかになった。また同じ就学先の子どものグループでお弁当を食べることで更に交流を深めることができた。初めて出会った子ども同士が楽しそうに遊ぶ姿を見て子どもの順応性に驚かされた。今後、就学先が少人数の子はどうするか課題は残る。

同じ就学先のお友達とお弁当を食べて仲良くなりました



就学前に同じ就学先の子とも同士で交流が持てる機会を作ること、就学に対しての不安が少しでも軽減されることでしょう。

保育園と幼稚園の初めての交流会

5歳児5月

あさひがおか保育園

【子どもの姿】

年長児として、クラスの友だちと意欲的に生活する姿が見られる。年長になったら隣の第七幼稚園の友だちと交流することを担任から聞いており、楽しみに待つ姿が見られる。

【ねらい・意図】

- 同じ地域に住む同年代の友だちと一緒に活動したり遊んだりすることを通して親しみの気持ちをもつ。
- つながりを深めていきながら就学に期待が持てるようにしていく。

【心掛けたこと】

顔合わせの時に両園で親しんでいるダンスをすることで、緊張をほぐし、一緒に楽しめるようにした。

幼稚園児と、お互いの園内見学を行うことで、幼・保の施設を知ったり、友だちに親しみが持てるようにした。

また、見学や遊びの場面では自主性を尊重し、子ども同士の関わりを見守るように進めていった。

みんなが知ってるダンスだから一緒に盛り上がったね♪



「ここは給食室だよ！
保育園の給食はおいしいよ！」

ドッジボールのルールが
分からないお友だちには
私たちが教えるよ！



【保育の経緯】

最初はホールに集まり、職員紹介やダンスをして触れ合った。幼稚園児と自己紹介を行った後、互いの園内を案内し、ポイントごとにカードにシールを貼り、園内を巡った。その後、ドッジボールや固定遊具など、好きな遊びを楽しみ、最後には「楽しかったね」「また遊ぼうね」と約束していた。

【考察】

最初は緊張したが、自分の園を積極的に案内したり、お互いの施設に興味をもったりする姿も見られるようになった。自由遊びでは、ドッジボールに幼稚園児を誘い、ルールを教えてあげながら、一緒に楽しんでいた。また、友だちの顔や名前を覚えたことで親しみをもち、次の交流会を楽しみにする姿が見られた。年に1、2回程度交流することを予定しており、交流会を重ねていくことで同じ小学校に行く友だちがいることを知り、就学にも期待が持てるようになると思われる。



幼稚園との交流で得られた関係を小学校生活に活かせることは、子ども達の不安の軽減になりますね。

日本の伝統行事「もちつき」への参加 2歳児

ひのめばえ保育園

【子どもの姿・思い】

1年が終わり、新しい年を迎える準備として「もちつき」行事が幼稚園であり参加させてもらうことになった。

使用する道具やもちつきの写真を見ることで期待を持っている子どもが多いと感じた。

【ねらい・意図】

＊もち米から餅になる変化を楽しむ。
＊寒さに負けず掛け声を楽しむ。
＊友達と協力して杵を持ち上げて協調性を育む。

【心掛けたこと】

＊通常とは異なった環境なので、不安な子へは寄り添い、無理強いはいしない。
＊導入として絵本や紙芝居で餅つきについて知らせた。
＊幼稚園児の様子を見せて期待を持たせた。



(おもちつきの様子)

少し大きな園児たちの真似をしてお友だちと先生と『よいしょ!よいしょ!よいしょ!』と力強い掛け声でした。

【保育の経緯】

幼稚園に行くことに、期待が大きかった子どもたち。しかし到着すると緊張気味の様子であり、大勢の幼稚園児や男性職員に圧倒されたが、楽しそうで元気な掛け声に笑顔も徐々に見られた。おもちがびよんと伸びる様子や餅をつく音に敏感に反応し楽しんでいった。帰るころには幼稚園の園児や職員にバイバイと元気に手を振る姿も見られた。

【考察】

日頃、幼稚園の前を通る度に、園児と挨拶や言葉を交わしている子どもたち。もちつき行事に参加させてもらう楽しさと、園内に入る楽しみで期待がすごく膨らんでいたものの、いざとなると緊張する子が多かった。しかし、年上の子のもちつきの様子を目から学んだかのように楽しんでいく変化が見られた。日頃活発に発言している子もおとなしかったが、帰園すると「楽しかった」と満足気な表情を見せていた。

小さいながらも、自分たちの場所でないことを感じたものの、絵本で見たもちつきを体験できた満足感と年上の園児とのふれあいで、幼稚園に親しみを感じたようだった。杵、うす、釜、せいろなど、普段目にしない道具も一通り見ることができ、後に絵本を見ながら振り返りもできた。

つきたての餅を皆で見ることはしたが、衛生上食べることはしなかった。



日本の伝統行事を体験して、絵本で見てきたお餅つきを実体験出来たことや、幼稚園との交流が出来たことは子どもたちにとって、良い経験となりましたね。

保育書類の書き方について

むこうじま保育園

【保育書類について】

保育書類は、全体的な計画から始まり、年間指導計画や月間指導計画、週間指導計画や個人案、連絡帳と多岐に渡る。

保育計画は子どもの姿を中心とした計画を立てる。計画を基準として、子どもの姿に即して柔軟に変えていくことが大切である。

保育指導計画 の役割

- ・ 保育理念や保育目標等に基づき、保育の内容が発達を踏まえて総合的に展開されるように作成された全体的な計画をもとに、具体的な保育が展開されるように、長期指導計画や短期指導計画を作成する。

作成の ポイント

- ・ 保育計画は、子どもの姿を中心として、全体的な計画や年間指導計画と照らし合わせながら作成する。どの計画も、子どもの実際の姿や変化に合わせ、柔軟に変えていくことが求められる。また、立案したら終わりなのではなく、※PDCAサイクルを確立し、適宜計画の見直しを行い、よりよいものへと改善を続けていくことが重要である。

子どもの姿を 捉えるために

- ・ 子どもの姿を捉えるためには、職員間のコミュニケーションを取ることが重要となる。日々の姿を職員同士で共有し、それらをもとに計画や記録を行っていくとよい。月案を作成する際や、保育日誌を記入する際に共有するとよい。
- ・ 子どもの姿は、10の姿から読み取ると、変化や成長がわかりやすい。記録の際も意識して書くといい。

お便り帳の 書き方について

- ・ お便り帳は、保護者とのコミュニケーションツールであったり、子育ての相談窓口になったりと役割は多い。
- ・ 記入の際は、①事実をわかりやすく②肯定的な表現で③決めつける書き方をせず④お願い事を書くときは理由を添えて⑤質問には温かく答える。上記五点を意識すると良い。

※1 【PDCAサイクル】



指導計画は、保育の方向性を明確にし、質の高い保育を実現するために不可欠なツールですね。計画を職員間で共有し、PDCAサイクルを上手に活用していきましょう。

